


<h1>ほのほの</h1>	第2号	発行
	平成14年	神戸市須磨区戎町1-2-3 TEL. 078-732-5209
	11月	信行寺門信徒会



第二十回

## 夏期特別法座

〈於・シーバル須磨〉



## ▲法座の模様▼

八月十八日(日)午前十一時から、シーバル須磨において、お勤めされました。

今年は第二十周年記念として御法話のほか、永年にわたり、出席された方々への表彰などもあり盛大裡に開催されました。

御法座の様子は次の通りですので、ご報告します。まず

川口さんの司会で始まり、門信徒会谷川会長と、信行寺藤

本総代のあいさつをいただきました。次いで副住職のお勤め

(三奉請、三帰依文)があり、午前中の住職からの法話があ

りました。

昼食後、特別法座に十五回以上出席された、十三名の表彰式

があり、引き続き法話があり、午後三時すぎに閉会となりました。

した。

表彰された方は次の通りです。(順不同)

- |        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 萬 董子、  | 谷川 俊雄、 | 長井 輝子、 |
| 福岡 繁治、 | 辻 英子、  | 青木 一江、 |
| 遠藤 政子、 | 野村 照子、 | 釜江喜代子、 |
| 谷川ゆり子、 | 赤坂 敏子、 | 川口 由子、 |
| 林 正子   |        |        |

# 水仙

釜江正巳

水仙は歳時記では一月、花暦では二月の花となつてゐる。凍てつく大地を破つて伸び、寒気にもめげずに花を開く。暖かい地方では歳末から、関東以北では三月ごろから咲く。

水仙は清楚な姿に馥郁とした香りの花をつけるため、わが国では古くから愛好され、厳寒から早春にかけては必要欠くべからざる存在となつてゐる。また水仙の三大自生地と呼ばれる淡路、福井越前、千葉房州では大量の自生品を切花として出荷している。

わが国に自生の水仙は、早咲性、芳香性など洋種水仙にない魅力をもつてゐるが、高度の不稔性で全く種子ができない。ヒガンバナなどと同じく染色体の構成が三倍体となつてゐるからであつて、従つて繁殖は専ら球根の栄養繁殖によるもので、分球能力は極めて旺盛であるが、品種改良はできないという厄介な代物。かつて私は、一粒の種子を求めてあれこれ研究を続けたが、結局「実らぬ研究」に終つてしまいました。

中国と日本の水仙は、同じ房咲系の一種で、恐らく室町期以前に中国から渡来したものと考えられている。当時の公家日記や花伝書などに水仙の記録がみられ、「送り花」として

珍重したり、茶花や立葉に用いた記録がある。

水仙は瑞祥の花として新春の床飾りにふさわしい。昭和三十六年郵便事業創始九十周年記念の花シリーズの一月は、水仙の花柄。また昭和五十年の年賀切手は、桂離宮新書院の水仙の釘隠の水仙の図柄である。実はこの水仙は花卉が五枚しかない。五枚だと植物学上では水仙というわけにはいかない。おめでたい年賀切手にケチをつけることではないのだが。

ギリシア神話のナルキッソス少年は、水面に映つた自分の姿に恋をし、悲しんで死んだあとに、一輪の水仙が咲いていたという伝説である。花言葉は「自惚れ・自己愛」。

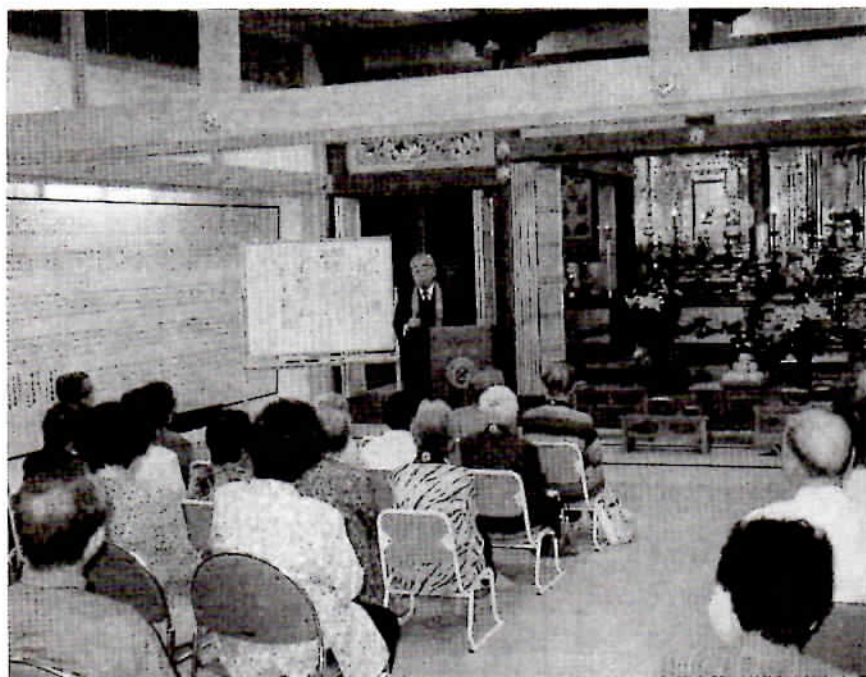
(神戸大学名誉教授)



桂離宮新書院の  
長押の釘隠の水仙の図柄



秋の彼岸法要  
〈9月14日〜15日〉



秋の彼岸法要に寄せて

▲高田慈昭先生をお招きして▼

九月十四日午後二時から信行寺において彼岸法要がとり行われた。当日は好天にも恵まれ多数の方々がお参りになり、本堂は満員の盛況だった。

当日の法話は「高田慈昭」先生からユーモアたっぷりばかりやすい語りで御聴聞させてもらった。

みなさん、ようこそお参りくださいました。お彼岸とは「彼岸に至る」という意味です。「迷いの世界」から「さとりの世界」に至るということです。「他力本願」とは、仏教用語ですが、この使い方が、世俗に簡単に使いすぎる傾向になっていきます。現代は、西洋の思想は、理解されていますが、仏教の思想が十分理解されていることが少ないと思います。最近科学が進行し遺伝子の問題などが論じられていますが、「迷信」というものは、現代にも通用しています。航空機の座席番号に「13」とか「49」という数字がありません。人間とは、科学がどんなに進んでも、宗教がないと、迷いどうしになるのではないのでしょうか。人間の知恵を越えられる知識はないのです。科学は知る世界、宗教は知らされる世界だと思います。私か若いとき、家出をしたことがあります。一週間程して腹をへらして帰宅したとき、母は一人分の食事を用意してくれていました。だまっけていても、心配してくれていたのが、親心というものです。

「南無阿弥陀仏」(ナムアマミダブツ)は、世界共通語です。「アマミダ様の胸に抱かれている私です」という意味がありま

す。「宗教」とは「道徳」ではありません。人間はうぬぼれてはいけません。私達は平穩に生きておられるのは、法律があるからです。「アミダ様」のお慈悲は母が子に与える乳のようなものです。受け入れられやすいように、「ナムアミダブツ」という言葉で与えてもらうのです。「帰る」ということは「かざり」がいりません。「帰る」ということは、「安らかに落着く」ということです。「この私のまんま、今の姿のまま、お任せします…」

これが浄土真宗の心であり、「もって生まれたまんま今の姿のまま、お慈悲にすがる」アミダ様におすがりすることです。

## 毎月の行事 信行寺

(月田幹雄)

毎月第一日曜日 午後二時より

護法会法座「蓮如上人御一代記聞書」

毎月第二日曜日 午後七時より

仏教講座 「教行信証」

住職

毎月第三土曜日 午前十時より

仏教讃歌のつどい コーラス みやび会

毎月第三土曜日 午後二時より

定例聞法のつどい 法話 住職

法義示談 (信仰相談)

住職

青少年心の相談室

(仏法の質問に応じます)

副住職

月一回日曜日 午後四時～六時まで

仏教青年会

副住職

## 問答

### 質問コーナー

### 住職

報恩講とは、どのような法要ですか。

親鸞聖人を開祖と仰ぐ浄土真宗の門徒にとつては、一年のうちで、もっとも重要な行事です。これは、聖人のご命日をご縁として、門徒が集い、報恩の心持ちをもって営む法要です。

弘長二年(一二六二年)に聖人が亡くなられてから、今日に至るまで、毎年勤められてきました。しかし、時代が急激に変化してゆくなかで、報恩講は、ことに、都市に住む人びとや、新しい世代の方がたには、だんだん馴染みが薄くなってきたように感じます。さみしいことです。

世の中の大きな流れが、人間の目を狂わせてしまい、だんだん、「ご恩、おかげさま」ということを見えにくくしてしまつたのでしょうか。

「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても 報ずべし

師主知識の恩徳も 骨を砕きても 謝すべし」と

親鸞聖人は仰せられます。

どこにいても、どんな境遇を生きていても、わたしが、如来さまの救いの手の真ん中にいると説かれています。報恩講は、ご恩を忘れていたわたしが、如来の救いの中に生かされている幸せを喜び、そのことを教えてくださつた親鸞聖人を、仰がせていた、たく法要です。



# 笑いの中にも



信行寺総代 藤 本 哲 郎

新年のカレンダーが出揃うこの時節になると、街の風情もにわかに一変し、いよいよ冬遠からずです。「月日は百代の過客」と云われますが、自然が営む規則正しい秩序は、確実に宇宙の循環に呼応していきます。

ままならぬきびしい世相にあつて、最近、溜飲をさげるすばらしいニュースがありました。小柴博士の物理学、田中博士の化学、お二人のノーベル賞受賞です。

変化の時代に先を見通すためには、何ものにもとらわれないう自由な発想が必要である。

しかし、人それぞれに身についた一定の枠組みがある。自由な発想を飛躍させ成就させるには、常に新しいことを知ろうとする努力が必要である。物理学の小柴博士の偉業は、意欲的な思考のもとに、意識的に、周到な、しかも綿密に組み立てられた研究の成果だといわれている。化学の田中博士の場合は、もとより豊かな研究課程の中ではあるが、予期せぬ、しかも無意識の中に、あの偉大な発見があつたと云われている。

人の脳の仕組みは、もともと大同小異で多種多様である。左脳は、基本的に必要な能力で、右脳は、それを飛躍的に伸ばすために必要と云われている。小柴、田中両博士も、意識的に、無意識的に、左脳の躍動と、豊かな右脳の活用があつたと思われる。

「碁」や「将棋」や「オセロ」のように「形」や「位置」を覚えるのは、右脳の認識を高めると云われている。また、視野の問題では、相手の左隣りに座る。つまり左視野に入るといふことは、右脳を刺激するのです。

最近、ますますさかんになっていくカラオケですが、そのプロにも似た唄いぶりは、まことに見事なものです。音楽は、右脳の要素が強いと云われますが、音というよりも、言語的な感覚でとらえる演歌などは、メロディーよりも詩の内容に重点を置き、むしろ左脳の要素が強い。それは、歌詩をとまなわないカラオケだけで聞いてみると、その味気なさがわかります。

人はまた、感情の起伏に左右され、その時その時の人格形成で喜怒哀楽をあらわしている。「笑う動物は、人間だけである。」とは周知のことですが、ユーモアに不感症の人が例外なく人間味に欠けている事実をみれば、我田引水ではあるが、笑いと、人間精神の本質から生まれるものかも知れません。

笑いの中にも、ばか笑い、あざ笑いなど、ゆがんだものもあるが、ほんとうの笑いとは、みな創造性をもつたものであり外界と調和して生まれるものである。和合ができない人は、笑うことや、笑わせることがすくなくはずです。恐れや、不安の量と、笑いのそれとは、反比例する。すなわち、物事を真に肯定できることの笑い、つまり包容できる精神こそが笑いの母胎ということでしょうか。

来年こそは、こぞって福笑いしたいものだ。



第19回信行寺念仏奉仕団・平成14年10月5日  
〈ご門主を囲んで〉

## 念仏奉仕団に参加して

引率者 金野和雄

人間六十歳を越えますと、坂道を駆け落ちるような早さで、一年が流れて行くような気がするのは私だけででしょうか、ついこの間、西本願寺へ上山させて戴いたのに、今年もその時期が参りました。

十月四、五日、人数は十七名でしたが、ほとんどの人が体験者で楽しい雰囲気でした。

板宿を九時三十分出発し約二時間で宿舎に到着、早速一日目の日程に入り、まず国宝の「湧の間」での開会式とお茶の接待を受け、書院拝観、御影堂を見学、修復で外された一枚の大瓦、御影堂を三百六十年余り風雪に耐えた大瓦を全国から集った門信徒が心をこめて磨く奉仕がありました。

十年間もの歳月をかけての平成大修復工事、完成まであと六年、あのとつもない足場を外し、修復された御影堂と、宗祖七百五十回大遠忌を無事お勤めされる事を、全国の門信徒が待ち望んで居られると思います。その日まで私としても元氣でありたいと思っています。一日目の日程も終り、宿舎に戻り夕食後「開法会館」で聴聞し全日程を終了しました。

翌朝総御堂で、お晨朝（じんじょう）に全員参加、ご門主を導師に大勢の僧侶が仏説阿弥陀経をお勤めし感動しました。宿舎に戻り、朝食後、二日目の日程に入りました。説明会



と記念撮影、ご門主様との面接、その後百華園の清掃奉仕、閉会式があり、二日目の日程を無事終了致しました。

宿舎に戻って、バスで少し移動し昼食場所「いもぼう」へ京都の老舗でした。代表的な食べ物には特有の風味で、「ぼうだら」と「芋の炊き合せ」で、オイシ、カッタです。

食後全員で知恩院へお参りし、十五時三十分帰路につき、復路もバス内は楽しく雑談しながら無事板宿に十七時四十分着きました。

今回参加された方々、一年先の事を申しますと鬼が笑いますが、来年も又元気で、がんばって上山いたしましょう。

皆様ご苦勞様でございました。

合掌

## 『呂律の回らない酔っぱらいの話』

ろれつ  
川口昭次

暑い夏が過ぎて、絶好の行楽のシーズンとなりました。行楽の秋といえお酒が付きものですが、余り度を過ぎすと身体に良くありません。ほどほどにお酒を楽しんで下さい。

お酒をあんまり呑み過ぎて、笑い上戸や泣き上戸や怒り上戸などの酔っぱらい達があちこちに出没しますが、これらの酔っぱらい達に共通して言えることは、何れも『呂律(ろれつ)』が回っていない喋り方「じゃないかと思えます。

この『呂律』という語源をご存知でしょうか。実は、この

『呂律』という言葉は仏教用語から来ているのです。

寺院で行われる法要儀式の中で、仏教の經典などに節をつけて唄う仏教音楽を『声明』といいます。その起源は、インドで仏教の発生と共に始められ、この音楽が中国を経て我が国に伝えられて今日に至っています。

『声明』は唄ですから、当然メロディー・ハーモニー・リズムの三要素があり、それぞれに高低・強弱・長短・音色が異なっています。又、『声明』には、洋楽の「ドレミ」と同じように、音名が十二種類あつて、洋楽の『長音階』『短音階』のような音階が三種類あります。それは『呂曲』『律曲』『中曲』の三つで、普通はこのどれか一つの音階で唱えますが、特殊なお経のなかで、例えば『呂曲』『律曲』とを交互に唄い混せて唄えるものとがあります。これは非常に難しい唄い方で、練達のお坊さんがこの旋法で唱えれば、誠に美しい響きの唄となります。しかし、下手なお坊さんが唱えれば聞き苦しいものとなつてしまいます。それは、その經典の『呂曲』から『律曲』に変わる時の微妙な唄い回しが、上手く出来ないからです。

だから、下手な人に対して、『あのお坊さんはロレツが上手く回っていない』と、遠回しに貶したのが、『呂律が回らない』という言葉になつたのです。

これらのことは、先日私が、京都の大原にある天台宗の実光院（『天台声明』の根本道場）に行った時に聞いたお話です。